

J.M.クツツェー『ダスクランド』 ——二つの自伝

大 場 久 恵

はじめに

ポストコロニアル国家の作家達が、支配者によって語られる歴史に対して書くことによって反撃し、自らの立場から「別の」歴史を語る声を発し始めたとき、南アフリカ共和国白人系作家J.M.クツツェーはどのようなかたちで支配者の歴史に挑戦したのだろうか。それは、支配者の内部の視点から書くことによってその欺瞞と腐敗を暴くというものであった。本稿は、1974年に発表されたJ.M.クツツェー第一作『ダスクランド』(*Dusklands*)が、支配者の物語が形成される過程とそれが内側から崩壊し衰退していくサイクルをどのように描き出しているのかを考察するものである。

『ダスクランド』は、第一話「ヴェトナム計画」と第二話「ヤコブス・クツツェーの物語」の二つの物語から構成される小説である。前半は、アメリカ合衆国の戦略研究所の研究員でヴェトナム戦争のプロパガンダ作戦を分析しているユーージン・ドーン¹⁾の物語であり、後半は、18世紀のアフリカーナー¹⁾の冒険家ヤコブス・クツツェーの物語である。それぞれ舞台と時代の異なる二つの物語がどのように関係しているかについての説明は作者J.M.クツツェーによって何もなされていない。しかし、そのように別個の物語が分断されている状態にはあるのだが、一つの小説『ダスクランド』としての統一をもたらしいくつかの重要な要素が認められるのである。

第一に、これら二つの物語の並置は作者J.M.クツツェー本人の人物背景を示唆している。J.M.クツツェーは、1965年から71年までアメリカに滞在し博士号を取得し教壇にも立っていた。そこで市民権運動の勃興とヴェトナム反戦運動を目の当たりにしている。また、「クツツェー」という名前はアフリカーナー家系のものであり、南アフリカへのヨーロッパ人の入植はJ.M.クツツェーのアイデンティティーにとって重要な意味を持つであろう。泥沼化したヴェトナム戦争によるアメリカの苦悩も、南アフリカにおける暴力による白人の侵略の歴史も、J.M.クツツェーのアイデンティティー形成に重くのしかかることなのである。

第二に、二つの物語は帝国主義という観点から関連し合っている。アメリカによるヴェトナムに対する現代の帝国主義的な攻撃と、南アフリカにおける白人勢力による植民地支配である。ユーージン・ドーンとヤコブス・クツツェー、両方の侵略者が精神的かく乱状態あるいは肉体的苦痛のもとで語り、‘evacuation’（「撤退」あるいは「排出」）、‘withdrawal’（「撤退」）、‘penetration’

（「貫通」あるいは「侵入」）、‘dusk’（「夕暮れ」）などの共通のキーワードを断片的に漏らすことによって、この小説が全体として、侵略者の側がむしろまれている様子、つまり帝国主義の内部からの崩壊を示唆していると考えられる。テキスト全体に散りばめられた軍事用語が二つの帝国主義の物語は詳細において相互に関連し、一方が他方の深意を理解するための参照になり得るのかのように作用し合っていることを暗示している。

そして第三に挙げておきたい点は、両方の物語に見られる身体の表象の重要性である。二人の語り手によって、身体は、もはや生身のものではなく、支配者と被支配者、男性と女性、主人と奴隷の関係を書き込み読み解くためのテキストへとおとしめられている。彼らによる他者の身体への言及こそが、「他者」の存在を作り上げなければ自らの存在を確立することができない侵略者の欺瞞を示している。そして、繰り返される執拗なまでの身体への関心と暴力的な描写は彼らの狂気を表し、両方とも子どもに対する肉体的虐待の場面で物語の絶頂に達している。

以上のように暗示された二つの物語の繋がりを踏まえて、ヴェトナム戦争のプロパガンダ分析報告と、アフリカーナーの冒険記の伝承というかたちによって、『ダスクランド』の語り手がいかに自分自身のあるいは自分の民族の神話を形成しているのかをみてきたい。

1. 「ヴェトナム計画」——フィクションの中の暴力

支配者の語り、支配の下にある「他者」の存在を作り上げる、つまり「他者」についてのフィクションを作成する行為であることを考えると、『ダスクランド』もまたメタフィクションの作品であることは無視できない。J.M.クッツェーによって書かれた「ヴェトナム計画」は、インドシナ半島におけるアメリカの帝国主義を正当化するための神話を書く男についての物語である。ユージーン・ドーンは表象に取り憑かれた人間と言える。ヴェトナムに実際に行くことなく机上で戦争のプロパガンダ研究に従事し、また私生活で妻との実際のセックスよりもポルノグラフィを好むことにも表れているように、現実よりも自分の描いたファンタジーに興奮を覚えている。彼は、現実世界の経験に何の意義も見いだせず、その代わりに疑似体験にのめり込んでいる、つまり、フィクションの世界にいたいと願う男なのである。ユージーンの語り、がどのように身体、フィクションを作り、そしてこの「他者」のフィクションがいかにして彼自身の現実を確認する手段となっているのだろうか。

「ヴェトナム計画」の冒頭は、「ぼくの名前はユージーン・ドーン。ぼくにはそれをどうすることもできない。さあ、やるぞ。」という、自己の存在の強い意識と同時に自己の存在を自分で支配（統制）することができないという焦燥感を感じさせる声から始まる（7）。デイヴィット・アトウェルは、この冒頭についての議論で、ユージーンは、自分の存在と自意識に圧迫されしかしそこから免れることはできないという脅迫観念に捕われたものだと言っている（アトウェル 35）。まるで自分の存在についての物語を語ることは運命づけられたものと言わんばかりに、自己内省的な語りを展開していく。

この避け難い圧迫感というのがユージーンの語り全体を覆っていて、それは彼が自分の身体を支配することができないという苛立ちにも反映されている。彼はいつも「自分の身体、自らのなさに悩まされ」、「もうひとつからだがあればいいのに」と感じている（15）。自分の意識を超

えるどころかもはやその肉体は自分のものでもなく、他の生き物、「寄生するヒトデ」が住まう入れ物であるに過ぎない。図書館で作業に従事している間も身体の内側から沸き起こっている苦痛に苛まれ、「反抗する肉体のなすがまま」になっていると言う（19）。机に向かってプロパガンダ作戦の研究をすることが彼のヴェトナム戦争の疑似体験であるとすれば（実際彼は機関から提供されたヴェトナム体験ツアーの参加を拒否している）、図書館で経験する身体の痛みはヴェトナムの戦地での肉体的な経験へと置き換えられる。ユージーンが感じている執拗に続く身体の痛みと脅威の念はヴェトナムの兵士達が被っている過酷な経験や不安なのである。彼が自分の身体を支配することができない状態に、ヴェトナムの兵士達の身体の主体性の欠如が示唆されている。

妻マリリンとの夫婦生活においても、ユージーンは自らの肉体が原因で敗北を感じさせられている。「結婚の手引書」に習って、「任務」を遂行するかのように交わされる妻とのセックスは、彼に何の快樂ももたらさない（19-29）。妻のほうも喜びのかけらも示さない。この不毛な二人の交わりは、「手引書」とも「銃の操縦法」ともとれる“manuals”、「根元」とも「基地」ともとれる“base”、「排泄」とも「避難」ともとれる“evacuation”といった軍事用語で語られることにより（20）、ヴェトナム戦争のメタファーになっているとも考えられるのである。手引書通りの務めに関わらず喜びを示さない妻の身体の前で困惑しているユージーンは、爆弾をいくら投下しても戦いを終わりにすることができないアメリカの兵士達と重なる。

図書館の係員、ハリーの存在も、ユージーンの身体と他者の身体の関係の重要な側面を示唆している。それは、見る身体と、見られる身体の関係である。地下書庫の図書を番号通りに並べる仕事をこよなく愛するハリーであるが、その書庫の監視カメラの死角となる場所で自慰行為を行っているのである。監視カメラのメタファーは、観察されるものとしての身体の役割を理解するのに非常に有効である。帝国主義支配の最も強力な戦略の一つは、監視状態であるとされる²⁾。それは観察する側が優位に立つことを示唆するからであり、権力が観察される側を分析理解していく過程を示しているからである。そして支配される者のアイデンティティは監視する側との関係に合わせて適当な物に修正されるのである。監視カメラの死角にあると思ひ込んで一人であるいは女性と戯れているハリーは、観察されるものの無力さを表している。ハリー達は、カメラの代わりとなって隙間から凝視するユージーンの観察の下にあり、その身体は、もはや読み解釈される物に変わっているのである。

ユージーンは、妻の身体を物として観察することによって、困惑させられるような性的関係から逃れる方法を見つける。彼に、自分は「彼女をよく知っている」のだと思わせるのは、引き出しの一番奥のほうに隠されている一枚の写真である（30）。ポーズをとった妻マリリンのヌード写真で、他の男に撮られて隠してあることにユージーンが気づいたもののようである。ユージーンは、写真に写る妻の姿を「凍りついた瞬間に、凍りつかせる目に捕らえられた、凍りついた女」と評し、なんの感情も交えないファッションモデル達の写る『ヴォーグ』のページをめくってもちっとも興奮しない、と言う（30）。彼は妻の身体を雑誌のモデルと同じ次元にまでおとしめており、妻はもはや現実の肉体的関係を持つ相手ではなく、男性に消費されるための商品になってしまっている。妻の名前がセックスシンボルのステレオタイプ、「マリリン・モンロー」の名前を彷彿させることもまた、商品としての要素を示唆している³⁾。そして、商品としての妻は、ユー

ジーンに「無力感」(“powerlessness”)しか与えないのである(30)。

一方、いつも持ち歩いているブリーフケースの写真に対しては、まったく違う反応を見せ、無力感から救い出し、想像力を刺激してくれるものだとしている。ヴェトナムに関する報告を書くための資料としている写真なのだが、その中の性的な一枚を描写するユージーンの語りには、人間性のかけらも見られない。あるアメリカ人軍曹と少女とも思しきヴェトナム人女性の写真で、その中の女性は完全に非人間化され、男性の力を示すために突き刺された物、あるいは軍人の勝利を誇示するトロフィーかのように扱われている。そして、ユージーンはこの写真に「お父さんは子どもたちと浮かれ騒ぐ」という題を付けている。人間性を排除され、性的な暴力の下にある女性の存在が、父である帝国の支配者に力(‘power’)をもたらしているのである。

また、ユージーンは、その写真をもとに支配者の神話を書くことに成功しているだけでなく、性的興奮までも覚えている。写真が入っているブリーフケースに手を伸ばすことは「甘美な恥辱に満ちたデートに出かける」かのようなことであり、写真がもたらす興奮が、自分が「たしかに男なんだ」と感じさせてくれる経験となっている(35)。この性的アレゴリーは、ロバート・ヤングが“colonial desire”と呼ぶ、植民地における異人種間性交渉のファンタジーを示唆していることは明らかであるが⁴⁾、妻との乾いた夫婦生活で失われた男性としての力を再生することも可能になっている点で、エキゾティシズムの概念を表しているとも言える。グレーム・ハッガンは、異国の(‘exotic’)ものに喜びを見いだすエキゾティシズムは、対象となるものの「質」の問題ではなく、ある特定の審美的な「認識・知覚」の問題である、としている⁵⁾。つまり、ユージーンの場合においても、妻マリリンとヴェトナム人女性のセクシュアリティには「質」の違いは何もないのだが、ユージーンがヴェトナム人女性との写真を通しての交流で喜びをつかむことができると「認知」することが重要なのである。かつて植民地主義者のヨーロッパ人たちが、自国の人々を「程よく」刺激するために植民地から工芸品や植物などを持ち込んで展示したのと同じように、写真の中のヴェトナム人女性という「他者」は、ユージーンに安全な程度の性的刺激をもたらすのである。自分の身体の痛みという脅威や、不安だけをもたらす妻との肉体関係のために、自己を確立することも、自分の力を定義づけることもできないユージーンは、写真の中の他者との性的繋がりというフィクションをつくることによって、自分の存在を確認することができるのである。

ユージーンの精神は、息子との関係において破綻と再生を迎える。息子を連れ出しモーターに滞在するのだが、もはや周囲にはユージーンは精神病と考えられているため狂気の父親による誘拐事件へと発展する。ドミニク・ヘッドは、この連れ出した息子とともに過ごしている場面でのユージーンの語りに、過去形が意図的に使われている点を指摘している。ユージーンは、狂気を通して息子との思い出を回想し、ひょっとしたら治療として、過去の様々な場面を想像で追体験しているのではないかと考えられるのである(ヘッド 34)。ユージーンは、息子のマーティンがジグソーパズルを並べているのを見つめ、それが完成するとどんな絵になるのかを思い描いている。ばらばらになった記憶の断片を集め、無秩序の中から人間性を再生させようとしている兆しを見せているようにも思える。しかし、マーティンを見つめるユージーンの語りは瞬時に焦燥感に覆われ、支配者の崩壊を露呈する。

1965年2月以降、連中の戦争がその生命をながらえているのは、ぼくを犠牲にしてのことなのだ。ぼくは知っている、ぼくは知っている、ぼくは知っている、ぼくの男らしさを内側から食いつくし、ぼくの滋養となるはずの食物をむさぼり喰ったものがなにか、を。それはあれだ。子どもだ。ぼくの子どもではない。かつてはぼくの肉体のど真ん中に沈められたずんぐりとした黄色い赤ん坊だったのが、ぼくの血を吸い、ぼくの排泄物を喰らって大きくなり、1973年のいまでは、いまわしいアジア人の小僧へと成長している。(80)

自分の息子はただの「物」(“a thing”)となり、そして、ヴェトナム人の子どもにすり替えられる。息子さえもが、「他者」なのである。不自然な父親ユージーンと息子の関係の破綻は、アメリカ帝国主義の不自然な家父長制を示唆している。ユージーンは息子をナイフで刺したために警察に取り押さえられ、殴りつけられる。その瞬間にユージーンはとうとう現実に戻される。「いま、ぼくは痛みを感じはじめている。いま、だれかが、ほんとうにぼくを傷つけようとしはじめている。すばらしいおどろきだ」(89)。「ぼくの身体」ではなく、「ぼく」が、痛みを感じている。実際に自分に暴力が加えられることによって、ユージーンはフィクションの世界から目覚め、自分の意識を取り戻している。そして、ナイフで傷つけられた子どもの身体が、ユージーンの狂気の絶頂と帝国主義の破滅を表しているのである。

ヴェトナム戦争は世界で初めてテレビで放送された戦争である。家庭の居間のテレビの前で、戦地の映像を材料に、国民が戦争の物語を思い描くことが可能となったとも言える。実際にヴェトナムに行くことなく、写真や映像に写る身体を読み解きながら、「神話作成部門」の研究員としての戦争プロパガンダ分析に従事しているユージーンは、もはや「他者」のフィクションの世界に囚われの身になっているのである。作り上げた想像上の「他者」の物語を借りて、自分の物語を語ろうとし、自分の存在と力を定義しようとして自ら崩壊していくユージーンは、自らの権力を定義するためにヴェトナムの戦争を引き起こしたアメリカの帝国主義に重なるのである。

2. 「ヤコブス・クッツェーの物語」——歴史を語ること

「ヴェトナム計画」がインドシナ半島におけるアメリカ帝国主義を正当化するための神話作成者として働いているユージーン・ドーンの物語である一方、「ヤコブス・クッツェーの物語」は、自分の民族の神話を作ろうとする18世紀探検家の物語である。ヤコブス・クッツェーは南アフリカケープから北東に向かって奴隷数名を伴って上がっていき、「大ナマクア」の地に到着する。そこで病気になる、一部の奴隷にも裏切られ、キャンプから追い払われることになる。彼は再びこのキャンプ地を目指して復讐の旅に出て、明け方に襲撃する。この明け方の奇襲がユージーン・ドーンを喚起させるのは、“dawn”（「明け方」）が名前のドーンと共通しているからだけではない。ユージーンは、想像力がよく働く朝の早い時間に仕事をするのを好んでいる。ユージーンが明け方にアメリカ帝国主義を正当化する新しい神話を生み出す姿と、ヤコブス・クッツェーが明け方に他の民族に対してしかける虐殺行為が重なるのである。そして、その冒険物語がどのように提示されているかに、この小説の最も重要な意義があると考えられることから、ヤコブス・クツ

ツェーの物語が民族の神話として形成される過程と理由を、これまで明らかになっている南アフリカの史実と比較しながらみていくこととする。

作者J.M.クッツェーは、アフリカーナーの民族意識の問題を示すために、意図的に複雑な構造をとっている。J.M.クッツェーは、自らを「訳者」としている。「訳者まえがき」によると、オランダ語で書かれたヤコブス・クッツェーの物語が、S.J.クッツェー博士（J.M.クッツェーの父親）によってアフリカーンス語に翻訳され、博士が1934年から48年にかけて行われた南アフリカにおける初期探検家に関する大学での講義に基づいた「序文」を加えて、『ヤコブス・ヤンスーン・クッツェーの物語』として1951年に出版された。そのオランダ語の元の「物語」とS.J.クッツェー博士の「序文」をJ.M.クッツェーが英語に全訳したもの、そしてそれに「二、三の文章を復元し」加え、「序文」を「跋文」に変えたものがこの本である、としている。つまり、現在『ダスクランド』に収められている「ヤコブス・クッツェーの物語」は、その時々にある意図を持って伝承されてきた民族の神話の形成過程を示唆しているのである。

S.J.クッツェー博士の序文（J.M.クッツェーによって「跋文」に変えられているもの）は、他の者によって語られてきた自分の民族の歴史を書き直し、先祖を英雄として蘇らせようとする意図を明確に示している。

本書は、より完全な、つまり、より公正なヤコブス・クッツェー像をあえて提示する。本書は、敬愛の書であり、同時に歴史の書でもある。すなわち、我々の歴史の先祖であり、わが民族の創始者のひとりでもあった人物にたいして敬愛をあらわし、さらに、我々白人がはじめて我々の奥地に住む原住民と接触した、あの偉大な探検の時代を想起する我々の心に、知らぬまに入りこんでしまった反英雄的な歪曲のいくつかを正すべく、真正なる歴史の証言を提示する。(213)

この序文の基になったS.J.クッツェー博士の講義が行われたとされる1930～40年代は、実は、まさに南アフリカにおいてアフリカーナーの民族主義の形成が絶頂を迎えた時期と重なっている。

17世紀中旬、ケープに到着したオランダ人の一団の中から当地に定住しようとする人々の集団が形成され、コイコイ人達から土地を奪いながら植民地のフロンティアが北東へと拡大していった。1770年代にいわゆるフロンティア戦争が活発となり、白人農民とコーサ人の戦いは70年も続くことになる。この間、1795年、そして1806年に再度オランダからケープを奪還したイギリスは、古参のオランダ人と争うつもりはなかったが、フロンティア戦争に介入し、本国に習い奴隷を解放したことにより、混乱を招き、オランダ人達をさらなる窮地に追いやることになる。既にオランダ本国との絆を失い、イギリス人達とも合流しようとしなない彼らは、新天地を求めて内陸部へと移動しようという動きを見せるのである。これが、1830年代の「グレート・トレック」と呼ばれるものである。実際には、農業経営の失敗によって負った借金、また無償奴隷の労働力に依存していたところに制定された奴隷制廃止の痛手などが原因となった、苦肉の新天地への移動なのであった。

しかし、S.J.クッツェー博士によれば、オランダあるいはイギリスの政府による支配の下で成功できなかった農民達が牛車を引いて北へ向かったなどという話は歴史の「歪曲」であり、宿命感

から解放されて油断のならない奥地へと入っていった牧牛業者兼狩猟家こそが自分達の先祖の真正な姿であると主張しているのである(214-215)。それは、ヤコブス・クッツェーの冒険記にも表れている。「われわれとホッテントット⁶⁾とをへだてる唯一の大きな違いはキリスト教だ。我々はキリスト教徒であり、宿命を背負ったものたち」であり(112)、神に導かれて約束の地へ向かう旅に出ているのだとしている。「現在という時間のなかに閉じ込められている」ホッテントットは歴史に残ることのない民族であり(112)、キリスト教の継承者として歴史を繋いでいく運命にある自分達の民族との違いを強調している。

1870年代、聖書のアフリカーンス語への翻訳作業が始められる頃からアフリカーナーの民族主義が形成され始め、1938年の「グレート・トレック」100周年祭で高揚を迎える。S.J.クッツェー博士による宿命を背負ったキリスト教徒として神秘化された冒険家についての講演は、この100周年祭の行事の一環ともとらえられるのである。峯陽一によれば、この時期のアフリカーナー民族主義の成長は、アフリカーナーの都市化のプロセスと重なっており、アフリカーナー都市民の利益をより下層の黒人との競争から防衛する必要があったことに根拠がある。アフリカーナーの利益を守るためには、まずそのアフリカーナーを民族・集団として定義する必要があった。そうして、フロンティアも曖昧ではっきりしたアイデンティティも持たなかった移民集団から、一つの民族が誕生したのである(峯 118)。

ヤコブス・クッツェーの語りにおける自分と「他者」との関係をめぐる考察は、支配者の心理的な不安を露呈させている。彼によれば、その関係は、「主人」と「奴隷」の関係ではなく、「主人」と「蛮人」(“savage”)の関係である(158)。そして、下層にある「他者」が追いつけてくる脅威を、アフリカの平原の向こうから絶え間なく空間を横切って接近してくる蛮人との空間的な関係としてとらえている。蛮人が「地平線のはずれから近づいてきて、見おろすわたしのまゝで成人となり(“grows to man”）」、そこから、人間と人間の、主人と奴隷の「喜劇」を演じるのだ、としている(158-59)。荒野のはるか向こうにいるときは自分にとって無でしかないものと、対峙し、同等の者としての関係が始まる可能性におびえているのである。このヤコブス・クッツェーに見られるおびえは、“ambivalent”なアイデンティティという概念に対する支配者の不安を示している。ホミ・バーバは、この心理学の用語をコロニアリズムのディスコースの分析に取り入れ、支配下の者が支配者に対して絶対的かつ完全に反対の者となることは決してあり得ないので、支配者と被支配者の関係は“ambivalent”なものである、とした。つまり、この関係の両面性、アンビバレンスは、被支配者との関係が、共犯関係と敵対関係のどちらにもなり得る、ということを示唆しているのである。それゆえ、被支配者の“ambivalent”なアイデンティティは支配者に対して「脅威」(“menace”)ともなり、支配者は常にその可能性におびえているのである。

ヤコブス・クッツェーとクラーク・ヴェルとの間にある主人と従順な召使いの関係の説明は、心理の深淵にこの“ambivalent”なアイデンティティに対する脅威の念があるために生み出される叙述であると言える。クラーク・ヴェルは、「善良にして忠実な」年老いた召使いで(182)、ヤコブス・クッツェーが、引き連れてきた全てのホッテントットの奴隷達に裏切られたときも、唯一主人に従ってともにキャンプ地を出て行く。ヤコブス・クッツェーの語りを一貫して繰り返される「ご主人さま」と召使いのやりとりは、あまりにお決まりで陳腐な主従関係を示しており、その叙述

には美化あるいは虚偽があると疑わざるを得ない⁷⁾。よって、「ナイフ一つと火打ち石一個を持って」、二人きりで川を下降していく際、「どうしたわけか」クラヴェルが穴にうっかりはまってしまい、二人の身体を結びつけていたひもが切れ、クラヴェルが押し流された、という説明も(184)、窮地を逃れ助かったクラヴェルの無然とした表情から考えると、実はヤコブス・クッツェーがナイフでひもを切りクラヴェルを裏切ったのではないかと推測するのが当然のように思われる。そして、ナイフは敵が存在することを象徴する銃の代りだと考え、ヤコブス・クッツェーにとってはクラヴェルもまた、近づくことが脅威となる敵なのである。キャンプ地を追われて出発した敗北の帰途、「他者」の生命を犠牲にして続けられる旅が、ヤコブス・クッツェーの叙述によって、火打ち石を持った文明への帰還の旅、「友」である召使いとの絆が引きちぎられた悲劇へと変えられている。

ヤコブス・クッツェーの語りは、大ナマクアの地へ復讐のために再び戻り、ホッテントットの村を壊滅させることで完了する。銃弾が命中して地面に放り投げられた少女の身体に始まる凄惨な襲撃の描写は、暴力による支配者の圧倒的な勝利を示し、「主人」そして「父」としての自らの存在を証明している。「歴史の手に握られた道具」(210)として、神の手に導かれた冒険を遂行し、必然的に勝者となる自分自身の存在を主張しているのである。いっぽう、S.J.クッツェー博士によって書かれた序文では、ヤコブス・クッツェーの物語のうち、ナマクアの地へ向かう最初の旅についてしか説明していない。村での滞在、帰還、そして再度の遠征と襲撃は、「歴史的に見て不適切」であり、語るに値しない、というのである。荒野へと旅に出た冒険家の「未来に突きすすむ力」のみが1930年代現在に提示すべき同胞の歴史であると考えているからである。そして、J.M.クッツェーがこの序文の翻訳にあたり、具体的にどの「二、三の文を復元」したのかはわからない。S.J.クッツェー博士が不適切なものを自らの語りにおいては削除したように、J.M.クッツェーも歴史の物語を操作しているのである。こうして、『ダスクランド』に収められた「ヤコブス・クッツェーの物語」は、民族の神話が形成されるサイクルを示しているのである。

おわりに

「過去を語る」ということは、ポストコロニアル国家の作家達にとって共通する特に重要な主題の一つであると考えられる。それは、支配者の物語りによって歴史が形成される過程において発言の機会を閉ざされてきたからであり、自らの視点で過去を語ることを禁じられてきたからである。彼・彼女達にとっての創作活動は、一度他の者によって語られてしまった物語に対しての挑戦であり、過去を語ることによる自らのアイデンティティの探求である。J.M.クッツェーは、「ヴェトナム計画」で、軍部に提出される報告書がそれを語るユージーン・ドーンの自伝となり得ることを示し、支配者の側の語りが内側から崩壊していく様を描いている。そして、「ヤコブス・クッツェーの物語」では、冒険家の物語の伝承が、語り継がれるごとに新たな自伝として生まれ変わり、欺瞞と歪曲で民族の神話が形成されていくことを示している。こうして一度形成されてしまった支配者の物語を突き崩すことに挑戦しているのである。しかし、J.M.クッツェーは、支配者の腐敗や衰退を避けられないものとして完全に諦めているわけではないのではないだろうか。ユージーン・ドーンが記憶の回収によって癒されていく兆しを見せているように、過去を語る

行為によって全ての者が再生する可能性があることを示唆しているように考えられるのである。

注

- 1) 「アフリカーナー」とは、17世紀にオランダからやってきた入植者の子孫であり、オランダ語にアジア系の奴隷や原住民コイコイ人の言語が混ざって形成されたアフリカーンス語を話す人々である。アフリカーナーとは、アフリカーンス語で、「アフリカ人」という意味。
- 2) Ashcroft, Bill. Griffiths, Gareth. Tiffin, Helen. *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*. London: Routledge, 1998. “surveillance” についての考察を参考とした。
- 3) Head, Dominic. *J.M. Coetzee*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. 妻マリリンと “the fetishistic sexual icon of Western consumerism” マリリン・モンローの名前の一致について指摘している。
- 4) Young, Robert. *Colonial Desire :Hybridity in Theory, Culture and Race*. London:Routledge, 1994. コロニアリズムのディスコースには異人種間性交渉のファンタジーという概念がまわりつくが、これは早期の入植者達が実際に性交渉という身体の交換を含んだ「取引」を行っていたことを直接に引きずっているのだと指摘している。
- 5) Huggan, Graham. *The Postcolonial Exotic: Marketing the Margins*. London: Routledge, 2001: 13. “... the exotic is not, as is often supposed, an inherent quality to be found ‘in’ certain people, distinctive objects, or specific places; exoticism describes, rather, a particular mode of aesthetic *perception* — one which renders people, objects and places strange even as it domesticates them, and which effectively manufactures otherness even as it claims to surrender to its immanent mystery.”
- 6) 「ホッテントット」とは「コイコイ人」の呼称である。民族蔑視の意味が強く、現在では適切なものではないが、物語のなかで使用されているため、本稿ではそのまま引用している。
- 7) Attridge, Derek. *J.M. Coetzee and the Ethics of Reading*. Chicago: University of Chicago Press, 2004: 19-21. 読者は、全てがヤコブス・クッツェーの自己欺瞞的なレトリックによる語りですすめられていると考えて読み続けているので、川の激流にのみ込まれて二人を結んでいたひもが切れてしまい忠実な召し使いクラヴェルは流されてしまった、というできごとを自然に読み続けている。ところが、助かったクラヴェルが焚き火で温まりながら慄然とした表情を見せていることが描写されると、突然、ヤコブス・クッツェーの語りに違和感を覚え、読者自身が物語の矛盾を自然なものに再構築することになると指摘している。

引用文献

- Atwell, David. *J.M. Coetzee: South Africa and the Politics of Writing*. Berkeley: University of California Press, 1993.
- Ashcroft, Bill. Griffiths, Gareth. Tiffin, Helen. *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*. London: Routledge, 1998.
- Attridge, Derek. *J.M. Coetzee and the Ethics of Reading*. Chicago: University of Chicago Press, 2004: 19-21.
- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994.
- Coetzee, J.M. *Dusklands*. London: Vintage, 1974.
- Head, Dominic. *J.M. Coetzee*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Huggan, Graham. *The Postcolonial Exotic: Marketing the Margins*. London: Routledge, 2001.
- Young, Robert. *Colonial Desire :Hybridity in Theory, Culture and Race*, London: Routledge, 1994.
- J.M.クッツェー『ダスクランド』赤岩隆訳、スリーエーネットワーク 1994。
- 峯陽一『南アフリカー「虹の国」への歩み』岩波書店 1996。